

1、アモスの出身地テコアはベツレヘムの南8キロの町。海拔850mで東にユダの荒れ野と死海を見下ろす地。ここで彼は羊を飼い、いちじく桑(貧しい者たちの食料)を栽培した。彼自身は当時の最下層小作農民というより自営農(中産)であった。エルサレムの王、貴族、祭司ら富裕層の体制を抛り所とした律法の宗教とは別な、素朴な信仰によって生活をしていた。7章始めには、アモスが見た三つの幻が記されている。これはアモスが預言者としての召命を受ける以前の神からの幻である、とされる。

2-1。第一は「いなご」の幻である(1-3)。旱魃があれば、いなごは作物に襲いかかる。「一番草」は王の軍馬の食料として供出させられた。「二番草」は春の雨の時に生え、これは農民の家畜が夏を越すための飼料である。いなごに全てを食い尽くされては、農民は飢える以外にない。「ヤコブはちいさいものです」と神に執り成しを求めて、聞き入れられた。「ヤコブ」は元来はイサクの子の名(創世記32:23f)。兄エサウとの和解にあたりベヌエルで神の使いとの格闘(和解を意味する)に勝って名をイスラエルと変えられる。そこから神の祝福としてのイスラエルが用いられるが、後々これは国家の名となり、権力の象徴となる。アモスは敢えてその「ヤコブ」を用いて、神の審判には赦しを乞う以外にない貧しい最下層の農民を覚えて執り成しをする。アモスは強いイスラエルの系譜ではなく、ヤコブの系譜を自覚していた。

2-2。第二は「火(日照り)」の幻(4-6)。地の淵を涸らしてしまう厳しい日照り(火)である。夏の出来事。地下水源の枯渇の結果、作物の枯死する。アモスはもっと端的に「やめてください」と嘆願する。神の憐れみ以外に立つ場のない農民の魂の在りよう「小さいもの」が受け入れられて、執り成しは聞き入れられた。

2-3。第3の幻(7-8,9は後世の付加)は、<振り下げ(計り縄)>の幻。神が城壁の上に立って<振り下げ>をもって立っている姿である。城壁は正しく積み上げなければ崩壊してしまう。<振り下げ>で試して傾いていればやり直す以外にない。イスラエルの罪(3-6章)は、もはや「神の民イスラエル」としての実質を喪失させていた。神の審判は必然であった。アモスはもう執り成しはしなかった。

3。彼は預言者としての召命を受ける前に、生活者として、既に神との人格的出会を経験していた。その基礎が預言者活動に決定的意味を持っていた。この出会いは、神が圧倒的な威力をもってこの人物を活かし、不可抗的に捕ら、彼が無条件に神の命令に従う召命を与えられた経験であった。彼は神に対してのみ義務を負って立つ存在となった。神こそが彼の思考の原点である。神中心(人間の相対化)が彼をしてあえてイスラエル(国家の絶対化)に対立させた。彼の審判思想は、根源的、究極的に神の本質を表している。今まで自明とされた「祭儀」「選民思想」とも対決した。

4、しかし、神の審判の前に、「小さい存在ヤコブ」(貧しい、無力な民衆を意識している)に自らの身を重ねて「としなし」をした預言者であった。執り成しとは何か。「神との人格的出会い」(A, バイザー)だという。他者を思って神に祈る在りようだとも言える。真剣なとしなしは神に向かって魂を注ぎだした出会いであろう。